

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530748

研究課題名(和文) 児童養護施設における心理療法効果測定とケースフォーミュレーション・プログラム開発

研究課題名(英文) Evaluation of Psychotherapy and Development of Case Formulation Program in Children's Homes

研究代表者

岡 昌之(Oka, Masayuki)

首都大学東京・人文科学研究科(研究院)・名誉教授

研究者番号：00092164

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：施設における心理面接の状況調査を実施したところ、保護者面接や集団面接は施設での勤務経験とともにその割合が高くなった。83.1%は施設での心理面接を困難に感じており、主にその困難は、施設が子どもの生活施設であることと関連していた。また、経験年数10年以上の心理職へのインタビュー調査から、施設における心理職の役割は、子ども個人から子どもを取り巻く環境に向かう三つの段階からなることが示唆された。本研究のまとめとして実施されたケースフォーミュレーションでは、施設ケアのうち、とくに「ケアの展開期」と「親への支援」において、心理職のみならずケアワーカーにも役立つ方法であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Results from a survey of psychotherapy at facilities showed that the longer the work experience at facilities, the higher the percentage of both parental and group psychotherapy. Of those surveyed, 83.1% found it difficult to conduct psychotherapy at facilities predominantly due to facilities being residential facilities for children. Furthermore, a survey of interviews with those who had more than 10 years of experience in the psychology profession indicated that the role of the psychology profession at facilities consisted of three stages from individual psychotherapy for children to the environment surrounding those children. This study showed that in the execution of case formulations pertaining to facility care, the "developmental stage of care" and "support for parents" were approaches clearly useful not only for those in the psychotherapists, but also for care workers.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理学的介入 児童養護施設 心理療法

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の被虐待児の「発見」と「保護」の増加は、社会的啓蒙の成果と言うことができるが、やはり重要視すべきは保護した子どもの成長をどう保証し、社会の成員として送り出していくか、という「ケア」の充実にある。

(2) 今後は、被虐待児のケアに関する方法論の標準化と水準(質)の向上が、喫緊の課題である。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、児童養護施設における虐待を受けた子どものケアに資する方法論の一つを提案することを目的としている。その基本が、心理アセスメントとしてのケースフォーミュレーション・プログラムである。

(2) このために、下記の手順で研究を行った。

① 児童養護施設における心理療法実態調査

② アセスメントおよびケア指標としての「ケースフォーミュレーション・プログラム」の導入

③ ケアワーカーの意見も取り入れた児童福祉施設用ケースフォーミュレーション・シートの開発

本研究のもう一つの目的として、心理療法の効果測定を意図したが、施設における子どもの成長は多面的であり、心理面接の効果そのものを取り出すことは難しい。そのため、①の児童養護施設における心理療法の実態調査で心理療法の効果について若干の考察を試みた。

3. 研究の方法

①については、全国579ヶ所(2010年6月現在)の児童養護施設に勤務する心理職を対象とした。調査は2010年11月から2011年1月に実施され、心理職未配置との連絡があった11施設を除く265ヶ所の施設(回答率46.6%)から計383名の回答があった。

②および③は、関東地区の児童養護施設2箇所に協力を依頼し、施設がケースの検討、振り返りを要すると判断した計7ケースについて、施設の常勤心理職とケースフォーミュレーションを実施した。その結果をケアワーカーにフィードバックし、面接調査を実施、その結果を質的に分析した。

4. 研究成果

(1) 施設心理職への調査では、児童養護施設における心理面接の状況と困難さということに焦点を当て、これまで経験的に積み上げられてきた施設における心理支援に関する示唆が実証的に検討された。回答のあった383名の内、個別心理面接を行っているのは97.4%であり、保護者面接や集団面接は施設での勤務経験とともにその割合が高くなった。83.1%は施設での心理面接を困難に感じており、因子分析の結果「子どもの激しい言動」「生活施設における心理面接」「面接構造への揺さぶり」といった共通因子が見出され

た。「生活施設における心理面接」の項目は、心理面接を困難と感じさせている変数と一致した。生活保障の場である児童養護施設独特の心理面接の困難さが明らかになるとともに、経験の浅い心理職への支援の必要性が示唆された。

(2) 施設に入所してくる虐待を受けた子どもへの具体的援助を構想するにあたり、以下の観点からケースフォーミュレーション・プログラムを施設心理職と実施した。

① 子どもの心理的・行動的問題をこれまでの、そして現在の状況から理解する

② その理解と判断に基づき、援助の具体的方法を見出し、関係者と共有する

③ 具体的な援助(介入)のなかで、その援助が適切か、仮説の検証を繰り返していく

介入に先立って施設全体の臨床像を明らかにするために、CBCLを実施した結果、以下の傾向が抽出された。

① 虐待群と非虐待群の差はひきこもりと、攻撃的言動においてのみ認められた

② 攻撃的言動は低年齢男子の問題であった

③ 男子は女子と比較して、注意とひきこもりの問題を抱えていた

男子の落ち着きのなさや攻撃的行動、ひきこもり傾向は、臨床的にはコミュニケーションの問題と想定される。つまり、大まかには発達的な課題を抱えた子どもが多いという施設像になる。そしてこれは、虐待を受けた子どもの入所児が増えている、ということに留められない最近の児童福祉施設の困難な特長を象徴するものでもある。被虐待と発達的なコミュニケーション障害という重複的な困難を抱えている子どもへの支援をどう構想するかという観点からも、ケースフォーミュレーションの意義が示唆された。

(3) 妙木がまとめた「施設心理：力動フォーミュレーション作成表」に基づき、協力施設において施設の心理職とケースを検討した。以下の手順に従い、7ケースのフォーミュレーションを行った。その結果は心理職からケアワーカー、管理職にフィードバックしてもらい、適宜変更を加え「児童福祉施設用ケースフォーミュレーションシート」を作成した。この試みは「他職種との協働」において生かされる必要があるため、シートにはケアワーカーとの協働の糸口となる「ケアのポイント」が設けられた。

ケースフォーミュレーションの手順

① 心理面接の経緯と背景

1. 「経緯」：入所経緯と相談経緯

相談経緯は、施設入所後に心理面接が依頼された経緯(例えばケアワーカーからの依頼、など)を記入する。

2. 「問題・症状」

心理面接が求められる問題行動を明らかにする。この問題・症状は、外部から観察可能な明確さが求められる。

3. 「現病歴(問題の歴史)」

2の「問題・症状」がいつから始まったのか、を明らかにすることにより、心理的援助の目標を絞り込む。

4. 「主訴」：心理面接の目的

子ども本人の「問題・症状」を改善したいという自覚、動機、問題意識を明らかにする。また、問題行動に連なる担当者の思い、子どもに関する印象などをまとめる。2と4が心理面接の「契約」に際し、とくに重要となる。

5. 「成育歴」と「既往歴」※既往歴は身体の病歴

出生時の状況、養育環境、保育園などの状況、学童期、青年期などの指標から特徴的なエピソードを記述する。

6. 「家族歴とジェノグラム」

主な養育者とその家族について記載する。

7. 「臨床像（子どもの見た目・印象）」

心理職やケースワーカーから見た子どもの印象、またどんな性格か（外向-内向）などを統合的に記述する。

②心理力動的な仮説

1. 「子ども理解のための心理力動的仮説（子どもの困難の背景にあるもの）」

成育歴から反復的な主題を発見し、子どもの主観に添って仮説を立てる。

2. 「精神機能（心の働き）」

心理検査から発達の問題がないか、どんな援助が適切かを見出す（言語使用の問題など）。

3. 「パーソナリティ構造（その子のあり方）と葛藤の記述」

子どものパーソナリティ傾向から、葛藤や欠損、あるいは問題の位置づけを理解しようと試みる。

4. 「外傷的イベントとその影響（トラウマの影響）」

基本的に想像でなく、子どもが体験した出来事を記述する（児童票の記述を再検討する必要もある）。

5. 「反復的主题の発見」

子どもの問題を文脈に当てはめること、また子どもの内なる世界における支配的な対象関係のあり方を検討し、現実生活への影響を査定する。精神機能とパーソナリティ構造から、子どもに繰り返し生じてきた反復的パターンを基盤とする防衛や症状（問題）の改善を目指す。

6. 「総合的判断」

1~5に基づいて子どもの主観的問題を読み解き、援助方針を明らかにする。

2つの施設で実施したケースフォーミュレーションが子どものケアの流れのなかでどのような位置づけになるのかを検証するために、各施設からケアワーカーと心理職各1名ずつ（2施設で計4名）にインタビューを行った。インタビューは半構造化面接とし、「どんな視点で子どものケアを行ってきたか」「生活指導で困ったときにはどのようにしてきたか」「ケースフォーミュレーションがどんなことに活かされたか」などについて

質問した。2施設分、120分のトランスクリプトについて、修正グラウンデッドセオリー法（M-GTA、木下、2007）を用いて分析した。

サンプル数は十分でないが、分析の結果38の概念と9つのカテゴリーが見出された。9つのカテゴリーは4つのコアカテゴリーにまとめられた。この結果、とくに「ケアの展開」期における子ども行動問題は、往々にしてケアワーカー自身の問題と認識されたり、子どもの性格の問題と見なされる傾向があった。このことは、「子どもとの関係が行き詰まると、個に還元されていく」という悪循環が生じることを示していると考えられる。その際、ケースフォーミュレーションを通して、いまの子どもとの関係が、過去における子どもにとっての重要な他者との間で経験された関係の再演である、という視点が子どもとの関係の再確認につながり、そういった「子どもとの関係の客観化」がケアの安定に資すると考えられた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 村松健司 児童養護施設における心理面接の状況と課題 子どもの虐待とネグレクト、査読有、15(3)、2013、328-335
- ② 塩谷隼平 児童養護施設における心理職の役割の発展 東洋学園大学紀要、査読無、22号、2014、19-29

〔学会発表〕（計6件）

- ① 村松健司 金丸隆太 妙木浩之 岡昌之 児童養護施設における心理支援—勤務形態と経験年数の差異を中心に—、2011、日本心理臨床学会第30回大会発表論文集
- ② 村松健司 金丸隆太 妙木浩之 岡昌之 児童養護施設における心理支援 2—心理面接のあり方と困難を中心に—、2012、日本心理臨床学会第31回発表論文集、621.
- ③ 塩谷隼平 村松健司 金丸隆太 妙木浩之 河嶋奈穂子 岡昌之 児童養護施設における心理支援 3—生活指導への心理職の参加について—、2012、日本心理臨床学会第31回発表論文集、622.
- ④ 塩谷隼平 村松健司 金丸隆太 妙木浩之 河嶋奈穂子 岡昌之 児童養護施設における心理ケア 1、2012、日本子ども虐待防止学会第18回学術集会抄録集、235.
- ⑤ 村松健司 塩谷隼平 金丸隆太 妙木浩之 河嶋奈穂子 岡昌之 児童養護施設における心理ケア 2—経験年数別に見た心理面接の困難さ—、2012、日本子ども虐待防止学会第18回学術集会抄録集、236.
- ⑥ 村松健司 妙木浩之 金丸隆太 河嶋奈

穂子 岡昌之 児童養護施設における心理支援 4-虐待を受けた子ども理解とケアのためのケースフォーミュレーション、2013、日本心理臨床学会第32回発表論文集.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡 昌之 (OKA, Masayuki)

首都大学東京大学院人文科学研究科・名誉教授

研究者番号：00092164

(2) 研究分担者

妙木浩之 (MYOKI, Hiroyuki)

東京国際大学人間社会学部・教授

研究者番号：30291529

村松健司 (MURAMATSU, Kenji)

首都大学東京大学院人文科学研究科・准教授

研究者番号：00457813

金丸隆太 (KANEMARU, Ryuta)

茨城大学大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：30361281

(3) 連携研究者

塩谷隼平 (SHIOYA, Syunpei)

東洋学園大学人文学部・准教授

研究者番号：00453481